

シーブローパー著・宇戸清治訳

『罪との闘い』

財団法人 大同生命国際文化基金 二〇〇八年一月

グラデーシヨンのかかった薄い金茶色に塗られたような小石やタイトルの地模様（これは、大同生命国際文化基金から刊行される「アジアの現代文芸」の「タイ」シリーズに共通）に、タイ文字と日本語による「罪との闘い」というタイトルのカバーを見ると、小難しい印象を受ける。だが、アジアの文学の翻訳書に多く見られる「注の呪縛」から解き放たれた、日本語で書かれたかのような作品を読むうちに、そういつた危惧は消え、いつの間にかシーブローパーの小説世界に引き込まれてしまう。特にタイの隣国カンボジアと長らく関わってきた私にとっては、非常に興味深い作品の数々であり、またカンボジア人を含む多くのカンボジア関係者にも読んでもらいたい作品である。

巻頭に収められている長編小説「また会う日まで」（一九五〇）は、シーブローパーの長編小説の中でも後期の作品にあたる。読者の先入観を壊していくような出だしである。「その日は一月末の真夏の日差しが目に痛いほどまぶしい日で、しかも休日にあたっていた。」最初の一行を読めば、乾季真っ只中の暑いタイを思い描く。だが二行目の「おそらくは数千人に及ぶ人々

がメルボルンからほど遠くないセント・キルダ・ビーチやエルウッド・ビーチやモーニントン・ビーチを埋め尽くしていることだろう」という文章で、舞台がタイではなく、オーストラリアであることを気づく。「かつては私自身何度となく行ったことがあるし、景観を楽しんだり、いろいろな楽しい遊びをしたことがあるなじみの場所だ。」主人公「私」は、オーストラリアに在住しているタイ人なのだろうか、と思いつながら読み進めると、「私の耳に、風に運ばれた声が届いたのだ。『ドロシー、あなたは自分の慰めのために身内の命を絶とうなんて考える人間ではなかったはず。この小魚は本当はあなたの身内なのよ。』」という文章に突き当たると、「私」は、タイ人ではなくオーストラリア人なのだ。ただそこには釣った魚が自分の身内であるといっているように聞こえたり、川に放した魚が何度も足元に戻ってきたりと、仏教説話的な匂いも微かに感じられる。

「私」は、偶然にコメントという名の青年に出会い、親交を深めていく。コメントはタイの貴族の子弟でメルボルンに留学中であつた。「私」は、コメントから、今は亡きかつての恋人ナンシーに触発され、自我に目覚めてタイ社会の変革を決意したことを聞かされる。つまり読者は、オーストラリア人女性ドロシーという「私」に対して語るタイ人男性コメントの話を通じて、彼とオーストラリア人女性ナンシーの親交をたどっていく、という複雑な設定となっている。

ドロシーはタイのことは全く知らず、コメントに、オーストラリア人が紅茶と羊で暮しているのに対し、自分の国は米と水で暮らしていると説明され、「東洋の桃源郷のような神秘的な世界」を思い浮かべようとする。以後、本書の読者、つまり日

本人読者はドロシーと一体となつて、コメートの話に耳を傾ける。

タイはどこであろうと田圃に籾を蒔けば、神様が天から降らせた慈雨で自然に茎や葉が伸び、やがて見事な黄金の稲穂が実るという。それは国中の人間が食べるのに困らないほどの量で、余つた大量の米は外国にも輸出されている。タイの大地はとも地味に富んでいて、マンゴーを食べ終わった後、その種を地面に捨てれば、自ずと芽が出て幹となる「中略」熱帯地域に位置しているのは事実だが、耐え難い暑さというわけではなく、雨や優しい風に中和されて天候はきわめて穏やかである。都会、農村を問わず、人々は一年を通して月の柔らかな光を味わうことができる……（33—34）

コメートが美しく描く「日差しや月の光を浴びて営まれ、雨や風で癒されている、タイの農村の生活」と、タイの農民が持つ「他人に対する深い慈悲心や優しさ」に、私たち読者はすつかりタイの虜になつてしまうのである。「それほど心根の優しい人々と触れ合いたい、そんなに豊かな大地の上で暮したい」と思うようになるのである。だがコメートは警告する。

その住みやすいはずの国で生活している人々の暮らしは、情け容赦のない政治制度と社会制度のせいでもないほど醜い不正義に満ち、ぞつとするほどの不公平に満ちている。タイの九〇%に及ぶほとんどすべての国民の生活が劣悪な状態に置かれていた。……住民は、じつはその日その日を生き延び

るお金を得るために汗水垂らして働いている。そして、彼らの労働が生み出した価値の大部分を、首都に住むほんの一握りの人々が度を過ぎた享樂のために浪費している。（42）

この作品は、およそ六〇年も昔に書かれている。訳者解説にもあるように、現在のタイでは、社会的公平、身分意識の一扫、民主主義という指標は、相対的ではあるものすでに実現されている。物語の終盤で、コメートは「自国の人々の将来のため、ひいては人類兄弟のためにできる仕事に着手したい」と、帰国を決意し、ドロシーと別れる。

カンボジアにも、コメートと同様のバックグラウンドを持ち、同時代を生きていたカンボジア人たちは少なからずいた。彼らは留学先で、母国を思い、民衆のことを考えていた。だがコメートと、あるいはシーブーパーと何が異なっていたのだろうか。後にポル・ポトと呼ばれるようになるサロト・サルとの違いは何だったのだろうかと考えずにはいられない。

一方、本書のタイトルにもなっている長編『罪との闘い』（二九三四）は、タイトルのいかめしきとは裏腹に、恋愛小説としても読める。裕福なクプタワス伯爵家には結婚適齢期の長男マナット、次男マヌーン、末娘のモンター、そして若い家政婦ジェンがいる。マナットは品行方正で読書家であり正義感の強い裁判官、マヌーンは遊び好きの学生であったが、富豪の娘ワンペンと密かにつきあっている。病に倒れたことをきっかけにジェンを妊娠させてしまったマナットは、ジェンの好意に甘えて、自分が父親であることを表明せず、両親のいわれるがままにワンペンと結婚する。だが、罪の意識にさいなまれ、苦悩

し、まだ夫婦の契りを結んでいないワンペンと別れ、家を出る。連続ドラマであれば続きを心待ちにしそうなストーリーであり、それだけではなく、解説にあるように「マナットの行為や心理描写からは、訪日や訪豪以降の思想的転換を果たす前のシブラーパーの、近代的個我の獲得を目指して苦悩する屈折した姿」を読み取ることができる。登場人物の名前や、状況設定には、カンボジアの現代小説を多読した身としては、親近感を覚える。しかし「罪との闘い」というタイトル、切なく重いエンディングや、この作品が一九三四年に書かれたこと（カンボジアの初の近代小説は一九三八年）を考えると、また隔たりも感じるのである。

本書の解説によると、著者シブラーパーは、一九〇五年にバンコクで生まれ、一九七四年に亡命先の北京で六十九歳でその生涯を終えた。立憲革命後、政治の世界に誘われたが固辞してジャーナリスト、作家の道を選んだ。第二次世界大戦前、朝日新聞社の招待で来日し、戦後はメルボルン大学で政治学を専攻した。単なるタイ文学者というだけでなく、「虐げられた労働者や農民への熱い共感と社会変革の志を持ち続け、実践政治とは距離をおいた文筆家として、民衆啓発の役割に徹する姿勢を貫いた知識人」であった。作品のみならず、その思想は時代を超えて普遍性を持ち、その普遍性はタイ国内に留まらず、今後さまざまなメディアを通して世界に広がっていくだろう。

二〇〇八年一月にタイの国際空港が反政府組織に占拠され、一時閉鎖に追い込まれた事件は、まだ記憶に新しい。その一般の人々の政治に対する強い関心と行動力には目を見張る。コンビニやカフェ、ファースト・フード店が建ち並び、音楽メ

ディアを聞きながら颯爽と歩く人々は、東京と変わらぬ、ある意味、東京よりも便利で活気のある大都市バンコクを象徴している。宇戸氏によって日本のメディアに次々と紹介される、プラープダー・ユンのポストモダン文学や映像、ボーイズラブをテーマにしたマンガ、ジャーニーズ系のアイドルからは、タイが位置する「東南アジア」という言葉から想像しがちな、「素朴さ」や「泥臭さ」はまったく感じられない。

このような、社会意識の高さ、社会の発展、文化の重層性と多様性は、タイの人々が「タイ文学の巨匠」シブラーパーという作家、思想家を持ったこと、そして「今なおタイ人の心に生き続ける」ほどの多くの著作の読者となることができたことに起因しているのだろう。

金茶色の外カバーを外した布で装丁された表紙には、シブラーパーの直筆サインが刻字されており、つい指先で何度も撫でてしまう。タイ文字の並んだ下に、まっすぐ右に向かって引かれた線には、「東方光輝（シブラーパー）」の強い意志がみなぎり、その輝きは失われていないようにみえる。

（岡田知子）